

# ひょうご 水百景

## No.1-1 大谿川（豊岡市城崎町）

～北但大震災からの復興の象徴となった城崎温泉・弓形橋群～



写真-1 柳湯橋から大谿川と愛宕橋を撮影（平成23年5月）

### ■ 多くの文人・墨客が訪れた「文学と歴史といで湯の町」城崎温泉

上の写真-1は、城崎温泉街を流れる大谿川（おたにがわ）と愛宕橋を柳湯橋から撮ったものです。城崎温泉は、養老4年（720）に道智上人が発見したといわれていて、趣の異なる七つの外湯（鴻の湯、まんだら湯、御所の湯、一の湯、柳湯、地藏湯、さとの湯）があり、『城の崎にて』を書いた志賀直哉をはじめとして有島武郎や島崎藤村（昭和2年7月宿泊）、富田碎花、泉鏡花、与謝野鉄幹・晶子夫妻（昭和5年5月宿泊）、吉井勇、柳田國男、兼好法師、斎藤茂吉、小磯良平、司馬遼太郎など古くから多くの文人墨客も訪れた「文学と歴史といで湯の町」です。

志賀直哉が城崎を訪れたのは大正2（1913）年、直哉30歳の時です。同年4月に上京した直哉は、8月に友人と素人相撲を見て帰る途中、線路の側を歩いていて山手線の電車にはね飛ばされ重傷を負います。東京病院（現・東京慈恵会医科大学附属病院）に暫く入院の後、10月18日、療養のために城崎温泉を訪れ、旅館「三木屋」に約3週間滞在することに。

この時の経験を基に、大正6（1917）年5月、短編小説『城の崎にて』を白樺派の同人誌『白樺』に発表します。

小説の中で、「ある午前、自分は円山川、それからその流れ出る日本海などの見える東山公園へ行くつもりで宿を出た。「一の湯」の前から小川は往來の真ん中をゆるやかに流れ、円山川へ入る。」とあり、大谿川は“小川”と書かれています。

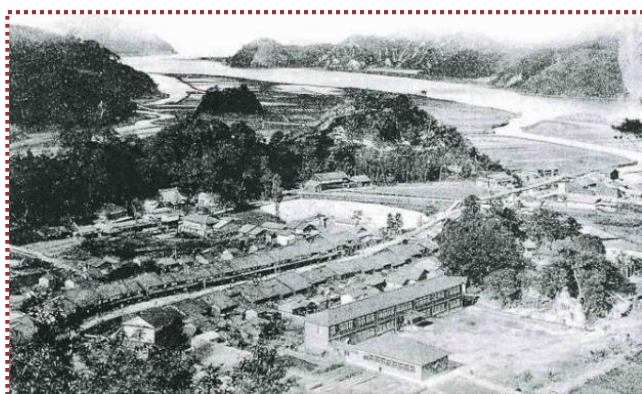


写真-2 愛宕山から城崎の街を望む（明治44年頃）  
（『目で見ると馬の100年』から引用）

## ■ 北但馬地震により城崎の温泉街は廃墟と化す

直哉は城崎温泉がよほど気に入ったのか、生涯に10数回この地を訪れています。その城崎温泉が、大正14(1925)年に起きた北但馬地震によって一面焼け野原になり、多くの尊い命が失われました。

失意のどん底から立ち上がり、「日本一ゆかたの似合うまち」といわれ、「外湯めぐり」が目玉の一つとなっている城崎温泉の復興は如何にして成し遂げられたのでしょうか。大谿川とそこに架かる弓形橋群、そして風に揺れるしだれ柳、城崎温泉を象徴するこの景観も、大震災からの復興のシンボルとなっています。

大正14(1925)年5月23日午前11時10分頃、但馬地方北部で発生した北但馬地震は、旧豊岡市・旧城崎町(現・豊岡市)を中心に甚大な被害をもたらしました。豊岡市のホームページには、城崎の惨状について「全町ほとんど壊滅し廃墟と化してしまっただけで、その損害額約1,200余万円、当時の宿料が1円前後であったことから、その被害の大きさの程が推察できる。」と書かれています。

地震の規模はM6.8、震度6の地震により、旧城崎町では、総人口の8%にあたる272名の方が亡くなりました。当時の建物は大半が木造であったため、その多くは一気に倒壊、折しも昼時で食事準備のために火を使っていた民家や旅館では、家屋倒壊に伴い瞬く間に火の手が上がりました。犠牲者の大半は昼食準備中の女性で、家屋倒壊によって圧死したほか、柱に挟まれたり閉じ込められたりしたまま猛火の犠牲になった人が多く、「北但大震災の最大の犠牲者は城崎の女性である」とまでいわれています。

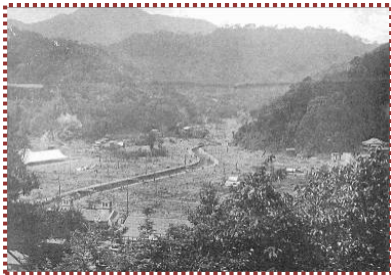


写真-3 城崎町の焼跡(『北但震災誌』から引用)



写真-4 城崎町の焼跡(『北但震災誌』から引用)



写真-5 北但大震災で焼けた城崎温泉街



写真-6 城崎町地藏湯前より焼跡一帯を望む(城崎温泉HP「HISTORY 城崎全町崩壊からの復活」から引用)



写真-7 西村佐兵衛翁の頌徳碑

## ■ 北但大震災からの復興に向けて

焼き尽くされた城崎の温泉街。当時の城崎町長は、今も続く老舗旅館「西村屋」の当主だった四代目・西村佐兵衛(写真-7)でした。季節はずれのだぶだぶのコートに地下足袋姿、首からメガホンをぶら下げて、焼け野原で立ちすくむ町民に叱咤激励を飛ばすとともに、六つの外湯(当時は六湯、「さとの湯」が平成12(2000)年に開設され現在は七湯)の温度を測り「この湯が湧き出る限り城崎町は復活する」と確信し、温泉街の復興を第一に考えました。

そして、母校・早稲田大学の人脈をあたり、美方郡出身の吉田享二<sup>\*1</sup>博士と、“様式建築の名手”と讃えられた岡田信一郎<sup>\*2</sup>早稲田大学教授に、一の湯・まんだら湯・城崎小学校などの建築設計とともに、大谿川の護岸と橋梁群の設計を依頼しました。

約3週間後には、焼跡となった城崎温泉の守護神・四所(しよ)神社(写真-8)の境内にむしろを敷いて町民大会を開催。以後、全会一致を原則とする町民大会を数十回重ね、駅前と大谿川沿いの一帯を防火地区とする県の復興原案を覆し、外湯を中心に栄えた城崎の歴史を踏まえ、外湯を元の位置に復元することを最優先しました。

木造の風情を生かした旅館を再建し、延焼を防ぐため6棟の外湯と小学校は鉄筋建造物として再建する。すべての地主から公募面積の1割の無償提供を受けて、大谿川の拡幅と道路の拡張、直線化を進める。橋や護岸を整備し、桜並木・柳並木をしつらえる。



写真-8 四所神社

こうして、「日本一ゆかたの似合うまち・城崎」の今日につながる街の骨格と情緒が形づくられていきました。関東大震災の2年後ということもあって、国内外から高水準の知識や技術が入り、復興は思いのほか早く進んだそうです。

※1 吉田亨二(よした ぎょうじ)：明治20(1887)年～昭和26(1951)年。兵庫県美方郡出身の建築家。建築材料学の権威で、建築材料協会会長、日本建築学会会長などを歴任し、各地の都市計画にも携わる。北但大震災後、城崎町の依頼により復興事業に関わった。

※2 岡田信一郎(おかた のぶいちろう)：明治16(1883)年～昭和7(1932)年。銀座の歌舞伎座や丸ノ内の明治生命ビルを手がけ、“様式建築の名手”と讃えられた。明治建築の文化的な意義を認め、関東大震災で被災したニコライ堂(コンドル設計)、日本赤十字社本社(妻木頼黄設計)などの修繕も行っている。特徴は桃山風建築様式の一の湯に現れている。今は一の湯前のある湯呑場も、当時は一の湯のすぐ隣にあり、和の趣のある小屋が建てられていた。このとき岡田は仏堂の趣を持つまんだら湯も手がけており、岡田信一郎の署名が記された設計図が発見されている。現在はいずれも改築されているが、岡田の造りだした趣は引き継がれている。

### ■ 最大の課題であった大谿川の河積拡大、側壁を高くした結果、橋は弓形の橋になる

大雨のたびに浸水被害をもたらす大谿川の治水対策は震災復興の最大の課題でした。兵庫県は川の拡幅と温泉街の地上げを計画しますが、地上げに必要な土が足りなかったため、不足分は川の両岸にコンクリートの側壁(写真-15)を設置し出水に備えることとしました。

しかし、毎年のように出水に悩まされていた町側は側壁をより高くすることを要求、結局70～80cmの側壁の工事費はすべて町が負担することに。そのため、橋も側壁の高さ分だけ高くしなければならず、結果として王橋と地蔵湯橋の間に架けられた4基の人道橋(橋長約10m)は弓形の橋となりました。



写真-9 震災前の城崎温泉街 大谿川に沿って旅館が並ぶ  
(『小林屋』HPから引用)



写真-10 大谿川に架かる愛宕橋



写真-11 弁天橋



写真-12 桃島橋



写真-13 柳湯橋

4 基の橋は、元々大谿川に架けられていた板橋(写真-9 参照)の機能補償として架けられたものです。上流から、愛宕橋・柳湯橋(写真-13)・桃島橋(写真-12)・弁天橋(写真-11)で、すべて同じデザインの RC 桁橋として昭和元(1926)年12月に完成し、高欄には銅製の窓飾りが配置され、親柱上部には灯籠が載せられています。復興当時、弓形の橋では車が通れず、「歩いてしか渡れない太鼓橋はけしからん」などと言われましたが、今では城崎温泉のシンボリック的存在であり、土木学会の「近代土木遺産」に選定されるとともに、平成18(2006)年度に県の景観形成重要建造物に指定されています。

また、王橋(写真-14)は一の湯前に架かる主要地方道9号豊岡竹野線の橋で、昭和2(1927)年11月に架けられた RC の桁橋です。現在の橋は橋長11.7m、幅員8.5mで、大型バスが十分にすれ違うことができる幅になっていますが、元々は幅も狭く川に直交して架けられていたそうです。

当時、西村町長は県が提示した王橋の設計図を不満とし、高欄や親柱などを町独自の予算で造らせたとか。

橋は当初「玉橋(たまばし)」と呼ばれていましたが、川は濁らない方がよいということで、昭和30年代に橋名板の「玉」から点を取り除かれています。そして、昭和40年代後半に架け替えられましたが、一部の部材をそのまま使い、築造当時の姿を忠実に復元しているそうです。

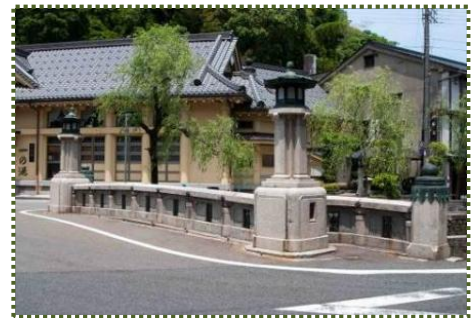


写真-14 王橋と一の湯

### ■ 大谿川の護岸は、地震で崩れた玄武洞の玄武岩を利用

大谿川の護岸は、約4km上流にある玄武洞<sup>※3</sup>から地震で崩れた玄武岩を川舟で運び、それを積み上げてつくりました。玄武岩は、50cm×50cm×15cm程度の大きさで、豊岡市のマスコットキャラクター「玄さん」の顔のような六角形です。

護岸の積み方は、その六角形を見せる亀甲積ではなく、同じ高さの石を使い、横目地を通して積む布積(整層積)を採用しています。

当時、玄武洞は石切り場として利用されていて、今でも多くの家庭にはここの玄武岩が庭石や漬物石として利用されているそうです。

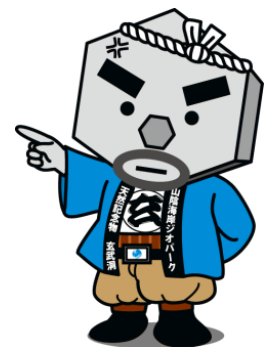
護岸工事は昭和2(1927)年に竣工、さらに昭和3(1928)年に側壁が概成、昭和7(1932)年には王橋から下流の川沿いに柳の木が、上流には桜の木が植えられました。

また、玄武岩の布積は目地が深いことから、写真-15のように目地の隙間に根を張って羊歯(した)の仲間などが顔を出して玄武岩の硬さを和らげています。

なお、昭和6(1931)年2月、玄武洞および青龍洞は国の天然記念物に指定されたことから、それ以降はたとえ崩れているものでも持ち出すことはできません。



写真-15 玄武岩護岸と側壁



硬いけどゆるキャラ「玄さん」

※3 玄武洞：文化4(1807)年この地を訪れた江戸時代後期の儒学者・柴野栗山(りつざん)は、この洞の岩石がつくりだす節理の形や断面の模様などから、古代中国の四神のうち、北の守護「玄武」を連想し、「玄武洞」(写真-16)と命名したといわれている。さらに明治

17(1884)年、東京帝国大学の小藤次郎博士は、玄武洞にちなんで同様の岩石の名称を玄武岩と名付けた。南側の青龍洞(写真-17)は、柱状節理の美しさから名付けられたといわれている。北側にある白虎洞(びゃくどう)・朱雀洞(すざくどう)の名は、昭和に入ってから名付けられた。

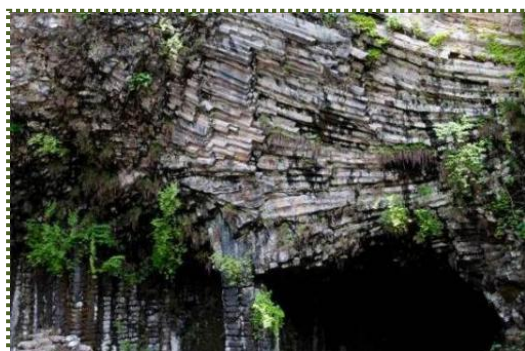


写真-16 玄武洞



写真-17 青龍洞



図-1 城崎温泉街の地図

## ■ モノローグ

城崎温泉は、筆者も仕事やプライベートで数回行ったことがあります。温泉街を東西に流れる大谿川とそこに架けられた弓形の橋、川沿いの風になびくしだれ柳が温泉情緒を醸し出し、歴史と風情を感じさせてくれます。

北但大震災以前の大谿川や街並みと見比べると、違いは一目瞭然です。未曾有の大震災で一面焼け野原となった城崎の街を、街のアイデンティティを見失うことなく復興を成し遂げた当時の西村佐兵衛町長はじめ多くの関係者に拍手！

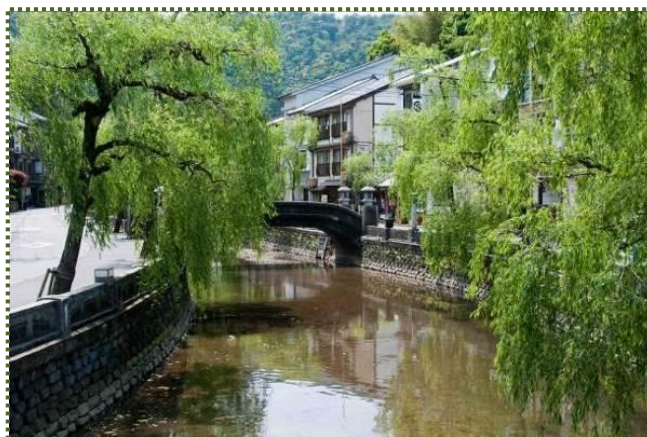


写真-18 水辺に向かって垂れ下がるシダレヤナギ（桃島橋付近にて）

### ヤナギ（柳）

ヤナギ科ヤナギ属の樹木の総称。「風見草」「遊び草」の別名もある。日本では、ヤナギと言えば一般にシダレヤナギを指すことが多い。樹木の中で最も特色のある属のひとつで、湿潤から乾燥まで、高温から低温まで、幅広い環境条件に適応し、種類が極めて多いのが特色である。ヤナギの漢字表記には「柳」と「楊」があるが、枝が垂れ下がる種類には「柳」、枝が立ち上がる種類には「楊」の字を当て、これらは万葉集でも区別されている。ヤナギは水分の多い土壌を好み、よく川岸や湿地などに生えている。自然状態の河川敷では、河畔林として大規模に生育していることがある。これは出水時に上流から流木化したものが下流で堆積し、自然の茎伏せの状態で一斉に生育するためである。挿し木で容易に増えることから、治山などの土留工、伏工ではヤナギの木杭や止め釘を用い、緑化を進める基礎とすることがある。植栽木として、川や池の周りに植えられた実績があり、先人が考えた水害防止対策といえる。これは柳が湿潤を好み、強靱かつ張りのある根を持つこと、また倒れて埋没しても再び発芽してくる逞しい生命力に注目したことによる。時代劇に出てくるお堀端の「しだれ柳」の楚々とした風情は、怪談噺につきものとなっている。



写真-19 柳湯前の富田碎花の歌碑

城崎の  
いでゆのまちの  
秋まひる  
青くして散る  
柳はらはら  
碎花

【参考資料】

- 1 『北但震災誌』 兵庫県編 大正 15 年
- 2 『震災と復興』 城崎温泉観光協会 HP <https://kinosaki-spa.gr.jp/>
- 3 『HISTORY～城崎全町崩壊からの復活』 きのさき温泉観光協会 HP  
<https://kinosaki-spa.gr.jp/about/history/kita-tajima-earthquake/>
- 4 『城崎物語 改訂版』 神戸新聞但馬総局編 平成 17 年 2 月
- 5 『北但大震災の概要～北但大震災の記録（城崎編）』 豊岡市 HP  
[https://www.city.toyooka.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_001/000/671/kinosakipanerudeta.pdf](https://www.city.toyooka.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_001/000/671/kinosakipanerudeta.pdf)
- 6 『兵庫県の近代化遺産～大谿川の護岸と弓形橋群・王橋』 兵庫県教育委員会 平成 18 年 3 月
- 7 『規範事例集【河川編】～大谿川・城崎温泉街地先護岸』 国土技術政策総合研究所  
<https://www.nilim.go.jp/lab/bcg/siryou/tnn/tnn04-34pdf/ks043405.pdf>
- 8 『志賀直哉、城崎温泉、北但馬地震、吉田享二、岡田信一郎、ヤナギ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 23 (2011) 年 6 月 『ひょうご水百景』 No.1

改訂：令和 8 (2026) 年 3 月 『ひょうご水百景』 No.1-1